

主 題：絶望から喜びへ

聖書箇所：詩篇 13篇

テーマ：絶望を覚える時、私たちはどのようにして喜びを見出すことができるのでしょうか？

今朝、皆さんとともに学びたいみことばは詩篇13篇です。

詩篇13篇 指揮者のために。ダビデの賛歌

:1 主よ。いつまでですか。あなたは私を永久にお忘れになるのですか。いつまで御顔を私からお隠しになるのですか。

:2 いつまで私は自分のたましいのうちで思い計らなければならないのでしょうか。私の心には、一日中、悲しみがあります。いつまで敵が私の上に、勝ちおごるのでしょうか。

:3 私に目を注ぎ、私に答えてください。私の神、主よ。私の目を輝かせてください。私が死の眠りにつかないように。

:4 また私の敵が、「おれは彼に勝った。」と言わないように。私がよろめいた、と言って私の仇が喜ばないように。

:5 私はあなたの恵みに抛り頼みました。私の心はあなたの救いを喜びます。

:6 私は主に歌を歌います。主が私を豊かにあしらわれたゆえ。

「主よ。いつまでですか」、余りの苦しみに追い詰められていたダビデが投げた苦痛の叫びでした。残念ながら彼が実際にどのような苦しみに遭っていたのか、具体的な歴史的背景についてはよくわかってはいません。しかし、ここで確実に言えることは、先が見えない困難の中で、ダビデは希望を見出すことができずにいたということです。これまでも学んできましたが、ダビデの人生はそんな試練の連続でした。ある時は愛する息子アブシャロムにその身を追われ、ある時は自分の仕える王からのいのちをねらわれ、ある時はいのちを脅かすほどの重い病気にかかり、ある時は信頼していた者たちが自分の周りから一切いなくなってしまう、その代わりにうそや偽りに満ちた人々に苦しめられることもありました。またありもしないことで責められ、不当な扱いを受けることもあれば、悪者が勝ち誇り弱い者がしいたげられるといった理不尽な世界を目の当たりにすることもありました。

この詩篇を記したダビデを取り巻いていた状況がどんなものかは確かに具体的にはわからなかったとしても、彼の人生を少し振り返れば、そこにはかず数え切れないほどの痛みや悲しみが存在していました。そしてダビデはそのような苦難を覚える中で肉体的、精神的に苦痛を煩い、終わりのない苦しみに絶望を覚えていました。「主よ。いつまでですか」、一体いつまでこの苦しみが続くのですかと。しかし、彼の心を重く苦しめていたのはそれだけではありませんでした。いやむしろ彼に大きな悲しみを与えていたのは、彼を取り囲むそんな痛みよりも彼の信頼する神様でした。皆さんもご存じのとおりダビデは誰よりも自分の主がどのようなお方なのか、自分の主がどんなにすばらしいお方なのかをよくわかっていました。しかし、ここではその主に幾ら自分が助けを求めても主が答えてくださらずに、まるで主が自分のことを忘れてしまったかのように、自分のことを見捨ててしまったかのように感じて彼は希望を失っていました。愛する主よ、私が苦しんでいるのにあなたはどこにおられるのですか？取り囲むさまざまな痛みと主に捨てられてしまったという思いが彼の心に大きな痛みをもたらしていました。

そして恐らくここにおられる皆さんも、これまでにダビデと同じような経験をされたことがあるのではないかと思います。私たちも普段の生活の中でさまざまな試練に直面します。いろいろな問題に頭を悩ませて、難しさで心が沈んでしまうこともあります。もちろんそんな場面に出くわせば、何よりもみことばに抛り頼み、みことばを読んで主に祈って委ねることが大切であることを知っている皆さんなら、そのとおりに実践しようと思えることだと思います。しかし、どれだけ祈っても問題が解決せず、どれだけ助けを求めても一切助けが与えられなかったとすれば、主が自分から離れてしまったかのように感じ、私たちは変わらず主に信頼し続けることができるのでしょうか？「主よ」、一体いつまで私は苦しまなければならないのですか？いつまで私はこの病氣と戦わなければいけないのですか？いつまでこの人間関係の問題で心を悩ませなければいけないのですか？なぜ私はこんなにも悲しまなければならないのですか？私は今苦しみの中にいます。一体あなたはどこにおられるのですか、主よ、教えてくださいと、こんな思いに心が支配され、失意を味わったことや悲しみを覚えたことが皆さんにはないのでしょうか？

試練の終わりが見えない時、また何よりもその中で主が遠く離れてしまったかのように感じる時に、大きな痛みや不安、恐れや悲しみが心の中にわき上がってきたりします。自分の妻をがんで亡くし、深い悲しみの中にあつたC・S・ルイスも自身の覚えた葛藤をこのように著書に記していました。「ところで、神様はどこにおられるのだろうか？これは最も不穏な兆候の一つです。あなたが幸せなときは、そのあまりの幸せに主をそこまで必要と感ぜなかつたり、その幸せで自分に対する主の要求を疎ましく感じてしまうこともあるかもしれません。しかし、冷静になって身を慎み、喜びと賛美で主を求めれば、主は両手を広げて歓迎してくれるでしょう。（もしくは、そう感じられるでしょう）しかしながら、切実な必要を覚え、他のどんな助けもむなしの時に主のもとに行けば、あなたは何を見いだすでしょうか？あなたの顔の前でバタンと閉められるドア、内側でつく締められるボルトの音。その後の沈黙…。なぜ神様は全てが上手くいっているときには司令官としていてくださるのに、困難のときには助け手としていてくださらないのでしょうか？」と。どんなに神様を知っていて、みことばに強く根ざしている信仰者であったとしても、この地上にあつては必ずさまざまな苦しみに直面します。そしてその時に神様を遠く感じて、不安や恐れを抱いてしまうことがあります。では、もしそのような苦しみが自分の身に降りかかってきたとすれば、私たちは一体どうしたらいいのでしょうか？そのような苦しみの中に取り残されたかのように感じる事があれば、そんな中で私たちは希望を見出すことなどできるのでしょうか？何もしてくれない、状況を変えてくださらない主に対して、不満や怒りを募らせるのでしょうか？主の助けをどれだけ求めても答えてくださらないから諦めて、別のところに解決を見出してしまつたり、失望して信仰を捨ててしまうのでしょうか？

感謝なことに神様はこの詩篇を通して私たちに大きな希望を与えてくれています。なぜならこの詩篇13篇を記し、喜びなど一切見出すことができないような暗闇の中にいたダビデが6節の最後で「私は主に歌を歌います。」と言っていたからです。驚くべきことに、絶望のどん底にいたダビデが最後には希望にあふれて主に心からの感謝を捧げていたのです。では彼はそんな苦しみの中であつてなお、一体どのようにして喜びを見出すことができたのでしょうか？彼の心を絶望から喜びへと変えたものは一体何だったのでしょくか？

○絶望から希望へ：ダビデから学ぶ祈りの姿 1-6節

その答えは非常にシンプルでした。彼は主に祈つたのです。彼は祈ることを通して、絶望的な状況にあつても喜んで賛美をすることができました。祈りを通して彼は主に確信を覚えていたのです。そんな喜びをもたらす祈りとはどのようなものだったのでしょくか？きょうはそのことを詩篇13篇からともに見ていきましょう。ここにダビデが捧げた三つの祈りの姿を見ることができます。これから私たちこのダビデの祈りの姿をともに学んでいくのですが、私たち自身もどんな状況にあつても主に祈り、賛美を捧げる者として成長していきましょう。また同時に、もしこの中に今苦しみを覚えている方がいるのであれば、またこの先苦しみに遭う時があれば、どうかこのみことばを思い出してください。このみことばが皆さんの励ましになることを心から願っています。

1. 主にありのままのすべてを告白すること 1-2節

さて、まず一つ目のダビデの祈りの姿が1-2節に記されていきました。1-2節「主よ。いつまでですか。あなたは私を永久にお忘れになるのですか。いつまで御顔を私からお隠しになるのですか。いつまで私は自分のたましいのうちで思い計らなければならないのでしょうか。私の心には、一日中、悲しみがあつます。いつまで敵が私の上に、勝ちおごるのでしょうか。」とあります。絶望を覚えていたダビデが捧げた祈りの姿の一つ目は主にありのままのすべてを告白することでした。彼は自分の心に抱えていた悲しみや失望といったさまざまな思い、また自分が直面していた問題についてもすべてのことを主に正直に打ち明けていました。

1) ダビデの抱えていた問題

ここで特に注目していただきたいのは、ダビデを悩ませている三つの問題に関して、主に告白していたということです。ダビデは三つのものによって大きく苦しめられていました。彼は一体どのような問題を抱えていたのでしょうか？

(1) 沈黙される神様 1節

まず一つ目に彼が挙げていたのは神様でした。ダビデにとって自分に答えてくださらない沈黙の神様が心に大きな痛みをもたらす要因なのだと書いていました。最初にも言ったように、ダビデは自分にとって神様が一体どのようなお方なのかをよくわかっていました。だからこそ彼はまず何よりも「主よ」と叫んだのです。彼は自分にとってこの神様が主、自分と契約を結ぶ特別な関係にあるあわれみ深く情け深い偉大なヤハウェであることを覚えていました。

この方が自分と個人的な関係にある主だからこそ、ダビデは苦しみの中であつてこの方のうちに何度も何度も助けを求めようとしました。しかし残念ながらその声は聞き入れられることはありませんでした。

た。幾ら主に祈っても、幾ら主に自分を救い出してくださるように求めても、いつまでたっても彼の状況が変わることはなかったのです。ダビデは思ったことでしょうか。主よ、あなたは私の神ではないですか？一体なぜあなたは私を顧みてくださらないのですか？主よ、一体いつまで私は苦しまなければならないのですか？と。だから彼は続けて「あなたは私を永久にお忘れになるのですか」と言います。ダビデは主を深く知っていたからこそ混乱していました。自分の主はいつまでも変わらない、約束を必ず守られるお方だと。主は自分のことを守ってくださる砦として自分とともにいつもいてくださるという約束を私にしてくださった。でも今、一体どうして自分はひどい困難の中であって、ひとり孤独を覚えてさまよっているのだろうか。主は私のことを忘れてしまったのではないかと。

そして悲しみを覚えていたダビデは1節の最後に「いつまで御顔を私からお隠しになるのですか」と付け加えていました。申命記6：25に「主が御顔をあなたに照らし、あなたを恵まれますように。」とあります。主が御顔を現わされるという表現は、主が人々に恵みを与えられるとか、人々を祝されるという意味で聖書の中で用いられています。しかしここでダビデが感じていたことはその真逆でした。主が自分から顔を隠されること、信頼する主が自分のことを忘れてしまっただけでなく、自分から祝福を取り上げようとしているように彼は感じていたのです。主が単に自分の叫びに答えてくださらないだけでなく、自分の祈りに耳を傾けてくださらないだけでなく、意図的に自分から喜びや祝福を取り去ろうとしていると。ダビデはこのような苦しみを味わっていました。想像できますよね？孤独を感じて失望し、悲しみや不安、混乱を彼は覚えていました。彼はそのような苦しみの中、ひとり暗闇を歩いていました。そしてその苦しみを彼は主に正直に告白していたのです。「主よ。いつまでですか」と。

(2) 心を支配する悲しみ 2a節

二つ目にダビデを苦しめていたのは彼の心を支配する悲しみでした。彼は2節で「いつまで私は自分のたましいのうちで思い計らなければならないのでしょうか。私の心には、一日中、悲しみがありません。」と言っていました。苦しみの中にいたダビデはその状況をどうにか改善しようとして、さまざまなことを思いめぐらせていました。どうしたら自分の抱えている問題を解決できるのだろうか？どうしたら自分を苦しめているその困難から解放されるのだろうか？自分のうちでさまざまな角度から何度も何度も問題を見て改善策を考えていました。私たちもそのようなことをしますよね？苦しみに置かれた時に、これを試してみよう、あれを試してみよう、もしこの方法がうまくいけば問題を解決することができるかもしれないと。

しかし、ダビデはそこで気づくのです。いつまで「思い計らなければならない」のだろうか、いつまで自分はこの苦しみに思い悩み、その苦しみに向き合わなければいけないのだろうか。どれだけ考えても、どれだけいろいろなことを試しても、いつまでたっても状況は変わらない。どれだけ知恵をめぐらせて策を思いついたとしても、抱えている苦しみはますます辛くなる一方だ。もう限界だ。考えるだけ考えてみたけれども、それらはすべて無意味だった。もう疲れ切ってしまった。こうして自分にはもうどうすることもできない状況を目の当たりにしたダビデは深い悲しみに襲われ、1日中嘆き悲しみながら歩んでいたのです。そしてダビデはその悲しみを主に正直に告白していました。主よ、いつまで思い悩めばいいのですかと。

(3) 勝ちおごる敵 2b節

そしてダビデをさらに悩ませていた三つ目のものは「勝ちおごる」敵でした。彼の敵が彼に大きな悲しみをもたらしていました。彼は2節の最後に「いつまで敵が私の上に、勝ちおごるのでしょうか。」と書いています。ダビデは悪意のある敵によってしいたげられていました。この敵が具体的に誰を指しているのかについてはわかってはいませんが、言えることは、彼は力ある敵によって攻め立てられ、ひどい痛みを負わされ続けていたということです。ダビデはそんな敵にしいたげられている中であって、主よ、一体いつまでですかとその痛みを主に正直に告白していました。

2) すべてを主に委ねて祈る

さて、ダビデが置かれていた状況を改めてまとめると、ひどく深刻なものでした。苦しみの中にいた彼が天を見上げて、主のあわれみを求めてもそこに応答はなく、だからといって自分の心のうちを幾ら探ろうとも問題を解決するすべを見出すことができず、周りには相変わらず彼をさげすみ傷つけようとしている敵たちであふれ返っていました。状況が改善する兆しを見せるどころか悪くなる一方で、そこには誰の助けも期待することができない。もしそのような状況に置かれたとすれば、主に文句を言ったり、どうして私にこんなことをするのかと怒りに任せて、主を非難することも容易にできたことでしょうか。しかし、ダビデがしたことはそんなことではなかったということを私たちは知っています。ダビデは主に祈りました。彼は祈りを通して自分の抱えている問題も抱えている思いもすべてを主に告白したのです。たとえ今答えを下さらなかったとしても、すべてを支配されているこの神に、自分の身を委ねて歩んでいました。

兄弟姉妹の皆さん、私たちもきょうこのダビデと同じように祈ることができるのです。ある時は自分の手に負えないような試練を経験して、希望を見出すことができないような場面に直面するかもしれません。ある時はどれだけ熱心に主に助けを祈り求めたとしても状況が改善せず、本当に自分とともに主がいってくださるのだろうかかと主を遠く感じてしまうこともあるかもしれません。いつまで苦しまなければいけないのか、そんな出口の見えないトンネルの中で悲しみに押しつぶされそうになることもあるかもしれません。またある時は主を信頼しようと努めても、不安や恐れが心の中にいっぱいになってパニックに陥り、苦しんだり失望したりすることがあるかもしれません。もしそのような状況に陥ったとすれば、私たちには何ができるのでしょうか？ダビデがその模範として見せてくれたものは祈ることでした。そういったすべての重荷を、自分の抱えているすべての問題を主に正直に打ち明けていたのです。私たちも祈ることができます。私たちはそのような困難の中で実は苦しいけれども、何事もないかのように振る舞うために気持ちに蓋をしたり、表面上だけ笑顔を振りまく必要はありません。また自分の意思の力や知恵で物事を解決する必要もありません。もし私たちが自分の知恵で物事を解決しようとするのであれば、自分の力によって困難を乗り越えようとするのであれば、恐らくそこに待っているのはさらなる悲しみでしょう。そんなものに助けを見出そうとすれば、また状況に打ちのめされて、さらに疲れてしまうこともあるでしょう。ダビデが私たちに教えてくれていることは祈ることです。ダビデのように、自分の弱さや抱えている問題や置かれている状況や感情のすべてを主に正直に打ち明けることです。たとえ今問題が解決しなかったとしても、たとえ神様がしていることが理解できなかったとしても、主はすべてなされていることをご存じのお方で、すべてのことを支配されているのです。だからこそ私たちは今この主に信頼することができます。そしてこの主に委ねて祈る時に、絶望の中であってなお私たちは喜びを味わうことができるのです。

2. 主に助けを求め続けること 3-4節

続いてダビデの祈りの二つ目の姿が3-4節の中に記されていました。それは主に助けを求め続けることでした。3節は「私に目を注ぎ、私に答えてください。」と始まっていました。ダビデは主が自分から顔を背けて自分を見てくださっていないと感じていたのです。だからこそまず何よりも主が自分に目を向けて、自分の叫びに応答してくださることを求めています。主よ、私から目を背けないでください、私の身に起こっていることをごらんになって助けを与えてください、ダビデはそう祈ったのです。

ここで皆さんに覚えていてほしいことは、ダビデはこのような状況の中であってなお主以外の何ものにも助けを見出そうとしていないということです。確かにダビデは苦しみの中にいました。自分が最も頼りとする神様からも応答を得ることができず、彼は孤独を覚えていました。ある意味、別のものに目を向けて違うものに心がとらわれても仕方ないような状況だったかもしれませんが、ダビデがしたことは、こんな状況にあってもおいつも主を見上げて、主に助けを求め続けることでした。

これを聞いてそんなの当たり前だと思われる方もおられるかもしれませんが、では自分に置き換えて考えてみてください。私たちは日々の生活の中でさまざまな苦しみに直面します。それが健康面に関する苦痛かもしれませんが、経済的なものかもしれません。家庭での問題や職場や教会での人間関係に関するものかもしれません。ある問題は確かに直ぐに解決することができるかもしれませんが、ある問題は長い間私たちを苦しめることがあります。自分の経験する苦しみが長期化した時に、私たちは変わらず主に信頼することができるのでしょうか？自分の経験する苦しみが一切先が見えなくなってしまった時に、この主のうちに助けを求め続けることができるのでしょうか？また主が自分の祈りを聞いてくださらないかのように感じた時、それによって孤独を覚えた時はどうでしょうか？私たちがなすことすべてが自分の思いどおりにならずに、いつまでも問題を解決することができなかったとしたら、私たちはどうでしょうか？もし私たちが感情や自分の思いに流されてしまうのであれば、主以外のものに目を向けてしまうことは容易なことかもしれません。私は主が主権者だと知っている、あわれみ深い神様であることも知っている。でも今の自分の状況を主はいつまでも顧みてくださらない、どれだけ自分が願い求めても主は自分の状況を変えてくださらない。主が自分の思いを聞き入れてくださらないのであれば、もう我慢の限界だ、自分の好きなように振る舞おう、自分の考えに従って生きて行こうと。

私たちの目を主以外のものに向けさせるような誘惑は、私たちの周りに数多くあふれています。そういったものは、主以外のものに目を向ければ解決策があるかもしれないと私たちに語りかけます。私たちにとって大切なことは、忍耐を持って主にのみ信頼し続けることです。私たちの弱さのうちに働いて、私たちに必要な助けをすべて備えてくださるそんなすばらしい方にいつも自分のすべてを委ねて歩み続けることです。ダビデはそれを実践していました。ダビデは感情に自分を支配させることはありませんでした。信仰によって、彼は自分に耳を傾けてくださらない、今そんな状態にある主に祈り続けていたのです。

またダビデは主の助けをこうも求めていました。3節後半から4節のところに、「私の神、主よ。私の目を輝かせてください。私が死の眠りにつかないように。また私の敵が、『おれは彼に勝った。』と言わないように。私がよろめいた、と言って私の仇が喜ばないように。」と。ダビデの状況はやはり深刻なものでした。彼は自分自身がひどく弱っていること、そしてもし主があわれんでくださらないのであれば、自分は死んでしまうとそこまで口にしていました。彼の敵は相変わらず彼を苦しめ、彼が弱っていくことを喜びとして自分たちの力を誇りにして生きていました。ダビデは今まさに主の助けを必要としていたのです。

しかし同時に、ダビデはこんな死ぬほどの苦痛を味わっている中であっても、その信仰が揺れ動くことはありませんでした。ダビデは苦しみの中にいて死が間近にまで迫り、主が答えてくださらないそんな中であってなお主に信頼し続けていました。それが証拠にダビデはここでも「私の神、主よ」と神様に呼びかけていました。ダビデにとって悪い時も良い時も変わることもない愛する個人的な関係を持つ偉大な主。だからこそダビデはどんな慰めよりも、どんな納得できる答えよりも主ご自身が自分の方を振り向き、ともにいてくださることを望んで神様の助けを求め続けていました。愛する主よ、どうか苦しみの中で死にそうになっている私を見てください、どうか私の声に耳を傾けてください。ほかの何も必要ではありません、私にはあなたが必要だと。だからどうか私にあわれみを示してくださいと。

ダビデはなぜ主が自分に答えてくださらないのか、その答えも持っていませんでしたし、主が今何をなさろうとしているのかも皆目見当がついていませんでした。ダビデは自分の命が脅かされるような試練の中であって、わからないことだらけだったのです。しかし彼はあることだけはよくわかっていました。それは自分の愛する主がどのようなお方かということです。彼にとって神様の存在を覚えるだけで、彼の心に十分な勇気を与えることができたのです。そして今日の私たちもこの同じ主に祈りを捧げることができます。ダビデが覚えていつも信頼していたその主に私たちもきょう祈ることができます。どんな時も私たちは助けを求め続けることができます。確かに困難を味わって、その中で理解できないことが増えれば増えるほど、私たちはなぜですか、どうしてですかと疑問で心が支配されてしまうことがあるかもしれません。私たちはよく自分の試練に対する答えを主に求めようとします。そしてもし自分の望んでいるような答えが与えられなければ、失望を抱いて主に信頼し続けることよりも、自分の思いどおりに行動するといった態度をとってしまうことがあったりします。私たちにできることは、苦しみの中であってなお主を覚え、祈り続けることです。納得できる答えを下さいと祈るのではなく、あわれみ深い神が自分をあわれんでともにいてくださることを求め続けるのです。主権者である方が私たちとともにいてくださることを覚える時に、私たちは絶望の中であってなお喜びを味わうことができます。

3. 主に喜んで賛美を捧げること 5-6節

そして最後に、三つ目のダビデの祈りの姿が5-6節に記されています。「私はあなたの恵みに抛り頼みました。私の心はあなたの救いを喜びます。私は主に歌を歌います。主が私を豊かにあしらわれたゆえ。」と書かれていました。絶望を覚えていたダビデが捧げた祈りの姿三つ目は主に喜んで賛美を捧げることでした。残念ながら、皆さんがお持ちの日本語の聖書には訳されていませんけれども、実はこの5節はこんな言葉で始まっています。「しかし」私は……と。ダビデはさまざまな困難を経てこれまでは大いに苦しんできた。しかし私は今主の「恵みに抛り頼」んでいると言うのです。私の敵が私を責め、よろめかせるようなことがあったとしても、今私は主の救いを心から喜ぶことができると。こうして主に抛り頼んだダビデの心はあれだけの苦しみ、あれだけの絶望の中にいたにもかかわらず、主への喜びで満ちあふれていました。そしてこのようにして絶望を覚えていたダビデが神の力によって希望に満ちあふれる姿に変えられるのを私たちは詩篇の中で何度も何度も見るすることができます。

詩篇31:12と14にはこうあります。「私は死人のように、人の心から忘れられ、こわれた器のようになりました。……しかし、主よ。私は、あなたに信頼しています。私は告白します。『あなたこそ私の神です。』」と。また、詩篇86:14-15には「神よ。高ぶる者どもは私に逆らって立ち、横暴な者の群れは私のいのちを求めます。彼らは、あなたを自分の前に置いていません。しかし主よ。あなたは、あわれみ深く、情け深い神。怒るのにおそく、恵みとまことに喜んでおられます。」と。絶望の中にいたダビデを喜びに満ちあふれた姿に変えた力は一体何だったのでしょうか？それは主ご自身でした。ダビデが主がどのような性質を持っているのかを覚えていたがゆえに、そこに信頼を置いたがゆえに、彼は状況に左右されることなく賛美を捧げ続けることができたのです。

◎ 喜びの土台としての主のご性質

この5-6節の中に一体彼がどうして喜ぶことができたのか、彼が土台として確信をおいた主の性質、主の姿が二つ書かれています。

① 主の恵み 5節

まず一つ目に「私はあなたの恵みに拠り頼みました。」という言葉がありました。ダビデが喜びの土台としたのは主の「恵み」でした。ダビデは主の「恵み」に拠り頼んだからこそ絶望の中で喜びを見出すことができたのです。この「恵み」というのは、主の忠実で誠実な愛のことです。主はご自分のものに変わらず良くしてくださる。どんな時代にあっても、どんな場所にあっても、誠実に報いてくださるお方だとダビデはそのことを分かっていたからこそ、その主の「恵み」に確信を置いていたからこそ、このように言うことができたのです。確かに今はひどい苦しみの中にあって、主が自分を捨ててしまったかのように感じることもある。でも自分の主はこれまでもご自分の民を守られ、愛を示されてきた。その「恵み」はいつまでも変わることがない。必ず約束を守られるそんな主だからこそ、この方は自分をいつまでも放っておくことはない。今の苦難の中でさえもこの主がともにいてくださることを知っているから、私は主を信頼して乗り越えて行こうと。ダビデはこうして主の「恵み」に信頼を置くことで喜びを見出すことができました。主の「恵み」に、主のあわれみに確信を置いたからこそ彼は賛美を捧げ続けることができたのです。

そしてダビデがこのような喜びを持ち、このような確信を主に覚えていたのだとすれば、今の私たちはそれ以上に大きな喜びを、大きな感謝を持つことができますはずです。私たちがこのようにして主の前に祈ることができることは当然の権利ではありません。苦しみや試練の中にあって、どんな時どんなことでも主に助けを求めることができること、これは当たり前のことではないのです。私たちは本来主に祈るという特権さえも持っていない愚かで惨めな罪人だったのです。私たちを造ってくださった主が決して喜ばれないような、忌み嫌われるようなことを行い、主に逆らって生きていた私たちに値するのは、ただ神様の御怒りの裁きだけでした。私たちが主のあわれみを受けるに値する、主の救いに値するような存在ではなかったのです。しかしそんな罪の中に死んでいた私たちのために、主ご自身が十字架に架かって罪の赦しを与えてくださったのです。

ローマ5：8には「しかし私たちがまだ罪人であったとき、キリストが私たちのために死んでくださったことにより、神は私たちに対するご自身の愛を明らかにしておられます。」とあります。主が私たちに「恵み」を示してくださったからこそ私たちの罪は洗い流されたのです。主が私たちに「恵み」を示してくださったからこそ、こんな愚かで罪の奴隷として歩んでいた者が、神の家族として迎え入れられ、聖い生きた神を「アバ、父」と呼ぶことができるようになりました。主が私たちに「恵み」を示してくださったからこそ、私たちの弱さに同情してくださるイエスにあって、神の前に自分の心の思い悩みも何もかもすべてを打ち明けることができますのです。私たちがどんな存在かとか、何かを成し遂げたからではなく、主の変わらないご性質、主の変わることはない愛と「恵み」、それが私たちが祈ることをよしとしてくださったのです。すべては主の「恵み」でした。だからもし私たちが祈る時に心に感謝がなく喜びを失っているのであれば、よく考えることです。自分がどれだけ罪深い存在なのか、そしてどれだけそんな罪深い私たちに主があわれみを示してくださったかを。私たちが祈ることも何もかも当たり前のことだと思い始めたその瞬間に、私たちの心からは主への感謝が失われていきます。しかし私たちがどれほど自分が罪深い存在かを知れば知るほど、私たちの心は主への感謝でいっぱいになるはずです。主のあわれみを、主の「恵み」を私たちが覚える時に、私たちにとってふさわしい応答は主イエス・キリストによって示されたその愛をいつも覚えてこの主に感謝を持って日々を生きて行くことです。

② 主の救い 5－6節

そしてダビデの喜びの土台となった二つ目のものは主の救いでした。5節の続きに「私の心はあなたの救いを喜びます」とありました。そして6節の最後にも「主が私を豊かにあしらわれたゆえ」とあります。主は苦しみから助け出すことができる、そんな力ある方でした。ダビデは今確かに苦しんでいたけれども、この主の助け出す力がどのようなものなのかを過去に経験していました。ダビデはこの主が偉大なお方だということをよく知っていました。その主を知っていたからこそ、自分の置かれている状況に解決を見出すのではなく、助けを与えることができる偉大な力を持った神に期待し、みずからを委ねていました。主は必ず約束を守られる、そして主のあわれみによって救われた私たちも同じ確信を持って生きていくことができます。この地上での生活が終われば、必ず主にお会いする日がやって来ると、私たちにも主は約束してくださっています。だからこそ私たちはたとえ今大いに苦しむことがあったとしても、この地上における試練を忍耐を持って耐え忍ぶことができますのです。

パウロもⅡコリント4：16－18節で「ですから、私たちは勇気を失いません。たとい私たちの外なる人は衰えても、内なる人は日々新たにされています。今の時の軽い患難は、私たちのうちに働いて、測り知れない、重い永遠の栄光をもたらすからです。私たちは、見えるものではなく、見えないものにこそ目を留めます。見えるものは一時的であり、見えないものはいつまでも続くからです。」と言っていました。。またピリピ3：20－21でも「けれども、私たちの国籍は天にあります。そこから主イエス・キリストが救い主としておいでになるのを、私たちは待ち望んでいます。キリストは、万物をご自身に従わせることのできる御力によ

って、私たちの卑しいからだを、ご自身の栄光のからだと同じ姿に変えてくださるのです。」と。確かに私たちは日々の生活の中であって、さまざまな試練に直面することがあります。その時は主が遠く離れているかのように感じ、心が深く沈むことがあるかもしれません。でも私たちに与えられている希望は私たちにとってこの地上がすべてではないということです。私たちには私たちが罪から救い出してくださったその方にお会いし、そしてその方が私たちの涙をぬぐい去ってくださる、そんな日がやって来るとい希望があるのです。かつて私たちがこの地上であって苦しんでいた罪にけがれた体を、いつの日か主は栄光の体へと取り替えてくださる、そんな希望を私たちは持っているのです。私たちはそのような必ず守られる主の約束を与えられているのであれば、主に信頼し祈り続けることです。主の救いと約束を覚えて喜びを持って賛美を捧げる時に、私たちは絶望の中であって喜びを味わうことができるのです。

○まとめ

さて今朝は、ダビデの祈りの姿から絶望を覚える時に、私たちはどのように喜びを見出すことができるのかを考えてきました。ダビデはその模範をもって私たちに教えてくれたのです。私たちはたとえどんな苦しみを味わうことがあったとしても、主が遠く離れてしまったかのように感じるがあったとしても、主にありのままのすべてを告白し自分の身を委ねて、主に助けを求め続けることができます。そして何よりこの主であって喜び、賛美を捧げながら生きていくことができます。主が私たちに与えられている約束を覚える時に、主がどのような方かを覚える時に、私たちには必ずこの主が私たちの状態を顧みて変えてくださるとい希望を持って生きて行くことができるのです。

皆さん、これはすばらしい約束ではないでしょうか？こんな約束を私たちが与えられているのであれば、私たちの責任はこの約束が与えられている者として、それにふさわしい歩みを日々の中でしていくことです。私たちはそんな歩みをきょう立てることができるのでしょうか？もしまだこの中に、主イエス・キリストを自分の救い主として知らない方がいるのであれば、どうかきょうその自分の罪を悔い改めて、あなたの罪のために死んでくださった主の犠牲を覚えて、この方のために生きる人生を始めてください。またこの主を愛している皆さん、この主のあわれみと救いを覚え続けることです。私たちの周りの状況は確かに変わります。私たち自身も変わります。しかし主のあわれみとその約束は決して変わることはない。だからこそ私たちがこの主に確信を置いて生きて行くのであれば、どんな状況にあっても揺るがされることはありません。ですからともに主を賛美し、主を礼拝し、そしていつも主に祈りを捧げる者として成長して行きましょう。